

林に到着して数分後、周君の大声で駆けつけてみると、なんと松の樹幹に大きな腹をした雌が、しかも丁度目の高さに静止しているではないか。夢中でカメラのシャッターを押すが、なかなかうまくピントが合わない。間を置かず、続けて2頭目、3頭目の雌が見つかった。林博士も、幼虫は何度か掘り出した経験があるが、成虫に遭遇したのは初めてだそうである。しかしその後はいくら探しても追加は得られず、いよいよ1本の松の根元を掘ってみることにした。掘り始めてすぐに、今度は羽化したばかりと思われる雌の成虫1頭と、雄の成虫2頭が地表から数センチの土中から現れた。さらに丹念に周辺を掘り進むと、若齢幼虫や、中～老齢と思われる幼虫が根の周辺の土中から何頭も転がり出てきた。この幼虫はずんぐりしていて極めて弾力に富み、頭部の先につき出した短いが頑丈そうな大あごで指に噛みつくとき痛い。おそらくこの大あごで根の樹皮を齧って食べていると思われる。

期待以上の成果に、きっと夜になれば雄の成虫がライトに集まるに違いないと欲張って、日没を待つことにした。ところが、暗くなってみると、多くの人が園内を散策しているのに期待したような照明は園内のどこにもない。仕方なく再び松林に戻って懐中電灯の明かりを頼りに1本ずつ探索して回ったものの、ようやく1頭の雄成虫が獲られただけであった。

カミキリムシ類の幼虫の世界的な大家、チェコのシュバツハ博士は、雌の後翅は退化していないが、同じカンショカミキリ亜科の *Philus antennatus*

と *Heterophilus punctulatus* の幼虫形態や生態について記載し、それに基づいたムカシカミキリ科の分類学的位置についても論じているので興味のある方はこの論文を参照されたい (Švácha *et al.*, 1997). *Mantitheus pekinensis* の幼虫は、これらとよく似た生態をしており、今回観察した結果から想像される生活史は次のようである。土中で羽化した成虫は地表に直径1cm弱の穴(実際に確認)を開けて脱出し、近くの松の樹幹によじ登る。雌はそこでフェロモンを放出し、雄は雌を探索して飛翔する。交尾に成功した雌は樹皮の浮いた隙間にまとめて産卵し、孵化した幼虫は地面に落下して直ちに土中に潜入する。土中で松の根に到達した幼虫は、その樹皮を齧りながら、おそらく2～3年をかけて生長し、地表に近い所で蛹化し、やがて羽化する。成虫の出現期は、今回の経験や標本データからも北京では7～8月ごろと思われる。シュバツハ博士も昨年同所で幼虫を採集されていて、いずれ詳細な研究成果が報告されるはずなので、本紀行では、本種の興味ある生息環境や生態の一端を写真で紹介するにとどめた。

引用文献

- Švácha, P., J.-J. Wang & S.-C. Chen, 1997. Larval morphology and biology of *Philus antennatus* and *Heterophilus punctulatus*, and systematic position of the Philinae (Coleoptera: Cerambycidae: Vesperidae). *Ann. Soc. Entomol. Fr. (N.S.)*, 33: 323–369.

【短報】石垣島におけるニセベニコメツキの記録

ニセベニコメツキ *Pleonomus makiharai* Ohira は西表島で採集された個体に基づき1970年に大平仁夫博士により新種記載された特異な形態をしたコメツキムシである。保育社の「原色日本甲虫図鑑 III」に図示されているものの採集記録が大変少ないようである。筆者は1973年に石垣島にて本種を得ておりその記録を報告する。



図1. 石垣島産ニセベニコメツキ。

1♀, 沖縄県石垣島於茂登岳, 5. IV. 1973, 筆者採集。

本種はこれまで、西表島で1例、沖縄島で2例、久米島で1例採集されており(渡辺, 2010; 有本氏私信), 本報告は5例目の採集例で石垣島からの初記録となる。

末筆ながら、本種についての情報提供と報告を勧めていただいた有本久之氏に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 渡辺昭彦, 2010. ニセベニコメツキが久米島で得られる。甲虫ニュース, (172): 26.

(〒901-1303 島尻郡与那原町与那原 3219-9 松村雅史)